

ヒグマワーキンググループの経過報告・今後の予定

1. 令和 5 年度ヒグマ WG の開催概要

- ・第 1 回会議 令和 5 年 8 月 8 日（火）斜里町産業会館
- ・第 2 回会議 令和 5 年 12 月 8 日（金）釧路地方合同庁舎

2. 主な議事内容

今年度の大量出没の状況と背景を確認の上、今後の方策等について議論を行った。

<報告事項：大量出没の状況と背景>

- ・12 月 6 日時点での人為的死亡総数は 3 町合計で 183 頭（うちメスは 115 頭、オスは 68 頭）
※2023 年の人為的死亡総数は 185 頭（うちメスは 116 頭、オスは 69 頭）
- ・出没はかなり早い段階（4 月）から頻発し、8 月頃までは農地への出没が多かったものの、9 月から 11 月にかけては農地に加えて市街地、特にウトロ地区への出没が多発した結果、羅臼町も含め多数の捕獲に至った。
- ・短期的な背景としては餌資源の不足である（サケマスの遡上量の少なさ、ハイマツやミズナラ堅果の凶作）。例年であれば、大量出没の年であっても秋になればヒグマは山に向かったはずだが、10 月や 11 月になっても出没が収まらず、結果として駆除数が増加した。
- ・中長期的には、知床半島のヒグマの増加が挙げられる。例年であれば国立公園外を推定出生地とする個体の捕獲が多数を占めているが、今年度のように半島全体で餌資源が不足した際には国立公園内の奥からもかなりの個体が出没し捕獲されたことがデータで明らかとなった。

※捕獲個体の推定出生地

2022 年…公園外 67%・公園内 16%・不明 16%

2023 年…公園外 36%・公園内 43%・不明 22%

以上の報告事項を受けた WG での主な意見・指摘事項は以下のとおり。

■第 2 期知床半島ヒグマ管理計画に基づく管理について

①個体数の管理について

- ・ヒグマの個体群をどういう水準で維持するのかを再検討すべきではないか。
- ・問題個体の増減を指標化して、それに応じて管理方針を決めていくべき。個体数と問題個体数を複数のフェーズに分けて、どのような場合に、どの段階の個体に対して、どんな対処を行っていくか、そういった全体のルールがまず管理計画として定められるべきである。
- ・今年度個体数が大きく減少したことで、来年度からさらなる捕獲を直ちに考えなくてはならない状況ではないため、この間を利用して議論を深めていくこと。

②モニタリングに関して

- ・大量出没に伴う大量捕獲という大きなイベントが起きたため、その前後でこういった変化が起きたのかをモニタリングしていくことは非常に重要。例えば、従来の観光船からの目

撃頭数以外に、新たにカメラトラップによる撮影頻度等を実施してはどうか。2019年から3年間で実施された環境研究総合推進費による調査も一定期間後に再度行う必要がある。

- ・問題個体数を把握できず、管理の対策効果が評価できない状況が続いているため、より簡便な方法で個体数と問題個体数の動向の把握方法を検討していくことが必要である。

③今後の対応

- ・メスヒグマの人為的死亡数が管理計画上の目安である上限目標（2027年までの6年間で計108頭）を超えたが、今後再び大量出沒があった場合においても、これまで通りの基準に基づいた捕獲は必要である。（WGで一致）
- ・ただし個体数が大幅に減少したと考えられるため、一般の狩猟については制限できないか議論が必要。
- ・個体数が少なくなったとしても、今後も餌不足であれば大量出沒は発生するため、侵入防止対策のあり方を、今ある選択肢に限らず再検討が必要。（電気柵の設置及び適切な管理、市街地でのゴミや水産加工場の残滓の管理徹底等も含めて）

④地元関係者による出沒対応について

- ・今年度の大量出沒において、地域住民や利用者への人身事故がなかったことは、地元関係各位の多大な労力のおかげである。

■知床世界自然遺産地域管理計画の見直し検討について

- ・見直し案の時点版に対して、特段の意見なし。

■第2期長期モニタリング計画に基づく総合評価手法について

- ・総合評価手法の案について、特段の意見なし。

3. 令和5年度ヒグマWGに関する今後の予定

令和6年度は2回程度の開催を予定。

- ・第1回WG：令和6年7～8月頃（斜里町または羅臼町を予定）
- ・第2回WG：令和6年11～12月頃（釧路市内を予定）

以上